

1 看護大学生の人生の意味・目的意識調査 —Purpose In Life Test データからの予備分析—

○山元 恵子（梅花女子大学看護学部）、平松 正臣（関西福祉大学社会福祉学部）

I. はじめに

看護大学生が、病気や苦しみという人生における運命的、不条理なものに対してどのような態度で臨むかによって、学生自身の生き方、及び、将来、看護職者としての他者への援助の在り方が変わってくる¹⁾。そのため、病気や苦しみに対して、どのような思いや考えを持っているのか、その集団としての思考の概要を見出すことを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象者：P 県 A 大学の看護学部 3 回生、(80 名) 3 回生の実習過程をすべて終了した段階
2. 実施期間：2011 年 1 月 7 日～15 日
3. 方法：P I L (Purpose In Test) を用いた。P I L は、Crumbaugh J. らが Frankl の考えに基づき、人生の意味・目的意識を測定する道具として考案したものである。今回は、Part B の NO. 11 項目 (病気や苦しみは) の文章完成法のデータを用いた。分析には、K J 法 1 ラウンドを用い、tentative model (仮説モデル) を形成した。
4. 倫理的配慮：調査の趣旨と方法、プライバシーの配慮について、参加の有無により成績に関係しないことを、口頭と書面で説明し、P I L テスト用紙を配布し、自由意思で回収箱に入れる方式をとった。

III. 結果

約 90 名の学生に、P I L テスト用紙の配布を行ったが、回収は 74 名であった (82%回収)。Part B の No. 11 項目に関しては、N=74 回答 54 (男 4 女 50) 無記名 (男 1 女 19) であった。K J 法 1 ラウンドの手法に則り、元ラベル 54 枚すべてを、データの語りかけに耳を傾けながら、似たもの同士にグループ編成した。表札作りは 2 段階行い、7 つの島に編成された。次に、全体の関係性を考えながら、空間配置を行い、A 型図解化した。

看護大学生 3 回生の「病気や苦しみ」に対する集団としての傾向は、根底に自分は病気に【なりたくない】という強い思いがあった。しかし、その思いだけにとらわれず、苦しみの渦中にいる人に対して【自分のことで精一杯であり、その人にしかわからない苦悩がある】【心身の痛みと悲しみが伴うため、自らの傍らにいてくれる人を求める】という相手の心情に立った思いが見いだせた。そして、病気や苦しみは【誰にでも必ず起こるもの】と考え、病気や苦しみを持つことに【なりたくない】自分ではあるが、【楽にしてあげたい】【自分と他の人にも、(病気や苦しみは) 共通の苦しみであり、(苦悩する人は) 他の人により救われる】という考えに発展していた。そして、病気の人と健康な人がお互いのことを思い、気持ちが通い合うことで、それらの思いが循環し、本流となり、健康な人も【その人の身になり支え合う中で、(それぞれの立場で) 苦悩の意味を見出し、人は自分の人生を乗り切る】という考えが抽出された。

IV. 結論

看護大学生は、自らの健康を強く願いながらも、病気や苦しみを持つ人の心情にも理解を示し、だれにでも起こるものと捉えていた。そして、病気の人と周囲の人々が、その苦悩の体験からそれぞれの立場で意味を見出し、自分の人生を乗り切ることができるとしていた。

1) 佐藤文子他：死と自殺に対する態度についての心理学的研究、Artes Liberales ,No. 44. p59-77 (1989)